

死を前にしての 日記より

—— 高齢者文学人生論

石川達三 (1905-1985)

『死を前にしての日記より』 (1985) 「新潮45」

『人生最後の鬱憤晴らし』 (1985) 「新潮45」

『私ひとりの私』 (1964) 「文芸春秋」

『流れゆく日々』 (1971-77)

寒い冬だ。春が待ち遠しい。

石川達三の逝去は、昭和六十年一月三十一日。
『死を前にしての日記より』で「寒い冬だ。春が
待ち遠しい」と記した日から十九日後であった。

つまり、臨終までの十九日間は日記をつけるこ
ともできない状態だったということになる。人が
死ぬ前はそれ日の日数は日記もつけられない無力
な状態になるのがふつうなのかもしれない。

『死を前にしての日記より』は一年前の二月十
七日からはじまっているが、入院のための中断期
間がある。十月三十日には『人生最後の鬱憤晴ら
し』と題して、『続死を前にしての日記より』が
再開され、翌年一月十二日で終わっている。

鬱憤晴らしという題名をつけるだけあって、こ
の作者には鬱憤があったが、作家という職業で得
た報酬を尺度にすると成功者の一人だ。『蒼氓』
で第一回の芥川賞を受賞し、『日蔭の村』『望な
きに非ず』『風にそよぐ葦』『人間の壁』『傷だ
らけの山河』『青春の蹉跎』など評判作を残して
いる。ベストセラーになった作品も多い。

自宅は田園調布の広い家で、百坪以上の庭と、
五六坪の畑があった。正月には長女や次女の家族
が来て十人以上の賑やかさであった。長男の家族
とは三月に雛祭りのすしを食べた。しかし、作者
は「私の死後、此の家は誰も維持できないだろ
う。土地の不動産保有税だけでも年に百万円取ら
れる。暮らして行く為の土地を私有する事さえも



高齢者文学人生論

死を前にしての日記より

も（悪）であるらしい。それでは庶民の生活に安定は来ない」と嘆いている。

また、成功した作家も病気には勝てない。脑梗塞が持病になっていた。「去年（昭和五十八年）の秋と今年の春、二度の入院で本当の私の人生は終わった。入院中何程か私は死にたいと思った。からだが思うように動かなくなった。視力も聴力も衰えてテレビも新聞も何も面白くない」。

根を詰めた文章を書くだけのエネルギーはないが、それでも日記は書く。たとえば、次の記述はこの社会派作家のホンネを示していると思う。

「永井荷風は明治大正期の文豪であった。しかし昔雑誌に出た作品（停電の夜の出来事）（春情鳩の街）を読んで私は軽蔑していた。浅草の踊り子たちと戯むれ、孤独に死んだ。彼の日記を高く買う人も居たが私とは異質の人と思っていた」、
「いささか大人気無いと思う。あらゆる欲を棄ててすがすがしい心で、すがすがしい文章を書き残したら宜いとも思うが、それほど悟り切っても居ない」。

老妻は信心ごころがあったのに、老作家には神仏に頼る宗教心はなかった。俳句でもやったらどうか。暇つぶしになるだろうとすすめられたが、俳句というものがまるで面白くない。それでも、俳句の如きものを詠んだことがある。

心吹く木枯らしすべてもみぢ散りぬ 石川達三